壁画古墳の星圖

藪　内　　清*

1.　高松塚の星団

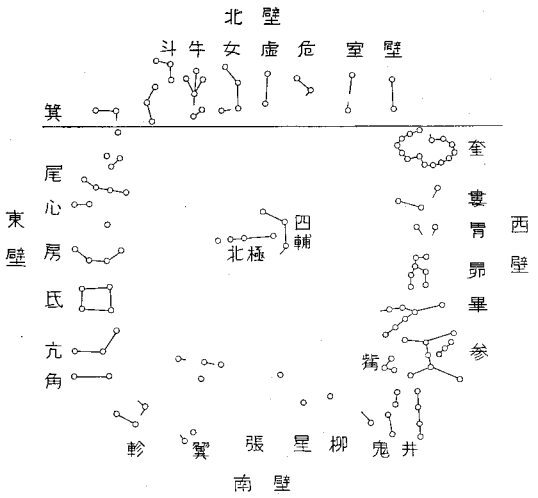

図 1　高松塚の天井の星宿図

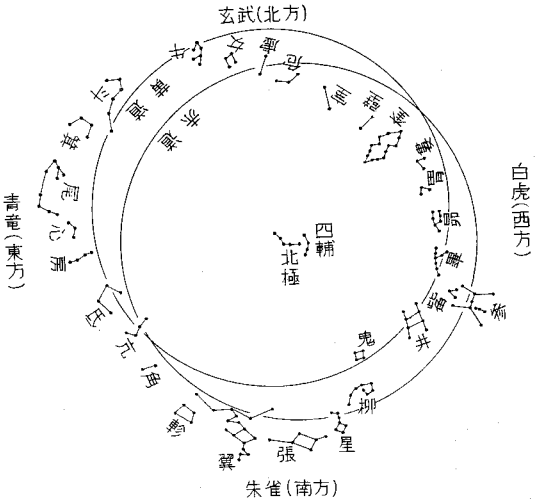

図 2　淳祐天文図の抽出部分

高松塚の壁画古墳が発掘されたのは 1972 年 3 月であるから，すでに 3 年以上を経過した．日本ではじめてのすばらしい彩色壁画ということで，ずいぶん世間の話題になり，埋葬者をめぐって多くの憶測が行われた．また早速に幾つかの書物が出版され，出版界にも高松塚ブームをまき起した．この年の秋，文化庁で現地調査を行うことになり，筆者も選ばれてその 1 員となった．幸にも 10 月 1 日の午後，古墳の内部にはいってほぼ 1 時間にわたって天井に描かれた星を調査することができた．いまさら書く必要もないことであるが，高松塚はこじんまりとした石造墳である．すでに盗掘にあって棺はなくなっており，南に向いたせまい盗掘口から出入りするのである．床の大きさは，南北方向が長くて 265 cm，東西方向が 103 cm ほどで，天井までが 113 cm，もちろん立つことはできない．中腰になりながら天井の星を数えたが，緊張していたのか，またたく間に時間が経ってしまって，早く出るようにとせがまれてしまった．四方はすべて石の上に漆喰を塗り，その上に壁画が描かれた．ただ出入口の南壁はひどく痛んで壁画は消えてしまった．

東西壁は人物画が描かれるほか，東壁には蒼龍（それに太陽），西壁には白虎（それに月），北壁には玄武が描かれていた．これらに南方の朱雀を加えたものが四神であるが，恐らく南壁には朱雀が描かれていたものと思われる．中国では赤道の近くに，天を一周して 28 の星座をえらび，それを二十八宿と呼んだ．五行説に従って，天の北極附近を中央と呼び，二十八宿を 7 宿ずつ東北西南の 4 方に分けることが古くから行われた．二十八宿の名称と方位の対応を示すと次のようになる．

東方七宿　角，亢，氐，房，心，尾，箕
北方七宿　斗，牛，女，虛，危，室，壁
西方七宿　奎，婁，胃，昴，畢，觜，參
南方七宿　井，鬼，柳，星，張，翼，軫

この二十八宿の順序は，角からはじまって天空を西から東に数えた順序である．ところで四神と呼ばれる蒼龍，玄武，白虎，朱雀は，以上に述べた四方の宿をシンボライズした動物であって，恐らく四方の宿を支配する神と考えられたのであろう．バビロニアの黄道十二宮が主として動物でシンボライズされているのと同じ発想であろう．

天井も四壁と同じように漆喰が塗られており，中央の 1 m 四方ほどの場所に点々と円い金箔の星が糊付けされている．金箔の大きさは直径ほぼ 9 mm で，すべて紙の

* 竜谷大学
K. Yabuuti: Star Charts Painted on the Walls of the Ancient Tombs in the East Asia

裏打ちがあったとみえ，ところどころ金箔がはげて紙だけが残っているところがある．星々を朱線でつないで星座を区別しており，一見してそれが何星座を示すかを知ることができる．星座が描かれた部分の中央に北極とそれをとりまく四輔の両星座があり，そこから少し離れて四方にそれぞれの方位に合致した7宿ずつが描かれている．もちろんすべてが完全に残っているわけでなく，ことに盗掘口に近い南方の7宿はよほど多くの星が消えて見えなくなっている．

中国では南宋時代に刻石された古い星圖，いわゆる淳祐天文図[1]が現存しており，筆者もその拓本を所持している．さらに信頼度は薄いが，北宋の蘇頌の『新儀象法要』に星座が描かれている．これらの星座は，唐代もしくはそれに近い過去の星座とほとんど変化がないので，高松塚の入室調査にさき立って，主として淳祐天文図によって必要な部分の星座のスケッチをとっておき，これと比較しながら星の脱落の有無を調べた．さらに後で文化庁で撮ったカラー写真フィルムと比較検討し，最終的に得た結果が図1に示されたものである．図1の上方の直線は，天井石の継ぎ目である．[2]この天井の星図を比較のため，淳祐天文図での対応する部分を図2に示した．一見して分るように，天井には北極，四輔を中心に，周囲に二十八宿がきわめて精確に描かれていることが知られるのである．淳祐天文図をふくむ中国の星図では，北極，四輔，二十八宿に対して174個の星が数えられているが，高松塚の天井に数えられる星数は125個であり，全体の70%近くが残っていることになる．しかも個々の星座や星座相互の関係はよほど正確に描かれていることが指摘される．詳しく淳祐天文図と比較すると，東方では星座の向きが似ているが，西方では，例えば婁，胃，昴の向きが逆になっている．またと參と觜の関係にも注意すべき点がある．このことは南方の入口を意識して星座が描かれていることを暗示する．次に高句麗の壁画古墳，近年盛んに発掘紹介されている唐代の壁画古墳に描かれた星図と比較するため，これらについて少しく述べておこう．

2. 高句麗古墳の壁画星図

高松塚の壁画と類似するものは，朝鮮と中国に存在した．朝鮮のそれは高句麗時代のものである．鴨緑江中流の右岸，中国吉林省輯安県の通溝平野は3世紀の初葉から427年まで高句麗の首都として栄えたところである．その後で高句麗は南下して平壌（現在の北朝鮮の首都）を首都とするようになり，668年に滅んだ．これらの両首都を中心に万を数える多数の古墳が散在しているが，墓室に壁画があるものは比較的少なく，通溝に9基，平壌附近に30基ほどがある．但し平壌附近のものにも，

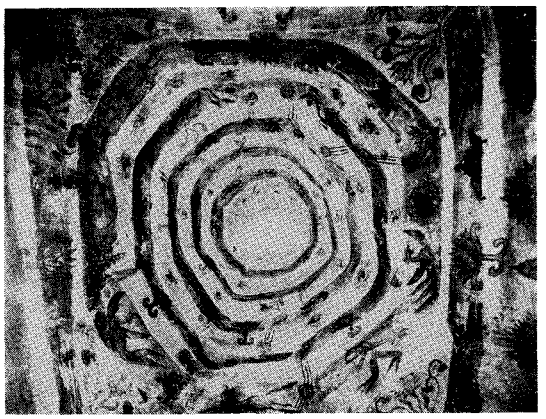

図 3　舞踊塚天井．星座が描かれている．

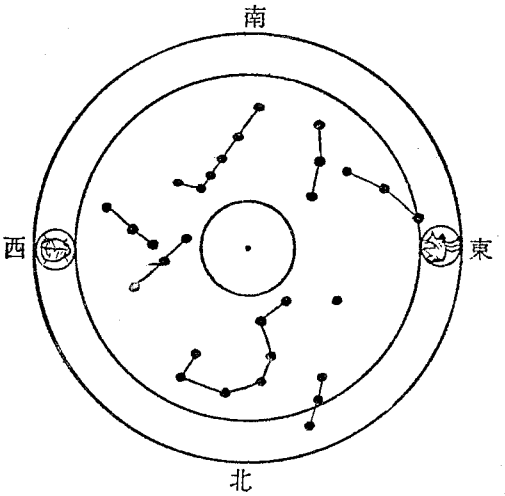

図 4　舞踊塚の星図．左右の小円は日月を示す．

かなり古い時代の古墳が存在する．高松塚がごくこじんまりとした古墳であったのに対し，高句麗時代の壁画古墳の規模はかなり大きい．有光教一氏によると，「平均的なところで，玄室は一辺の長さ3m余の方形プランに，頂上の天井石までの高さも3mくらいである」という．[3] さらに有光氏は，天井を除く主要な側壁に描かれた壁画のモチーフから，壁画を次の3群に分けた．[4]

A　人物風俗画を主題とするもの

B　人物風俗画四神図並存のもの

C　四神図を主題とするもの

しかも年代的にはほぼ A→B→C の順序で変化したものと考えられた．もっとも後期のC群では四神図が四方の壁一杯に描かれている．ところが高松塚のそれは四神のほかに，東壁と西壁に人物が描かれている．従って壁画のモチーフからいえば，B群に対応するのである．高松塚の壁画を高句麗のそれに結びつけて解釈する学者が，高松塚の壁画を古く，6世紀ごろのものとするのは，

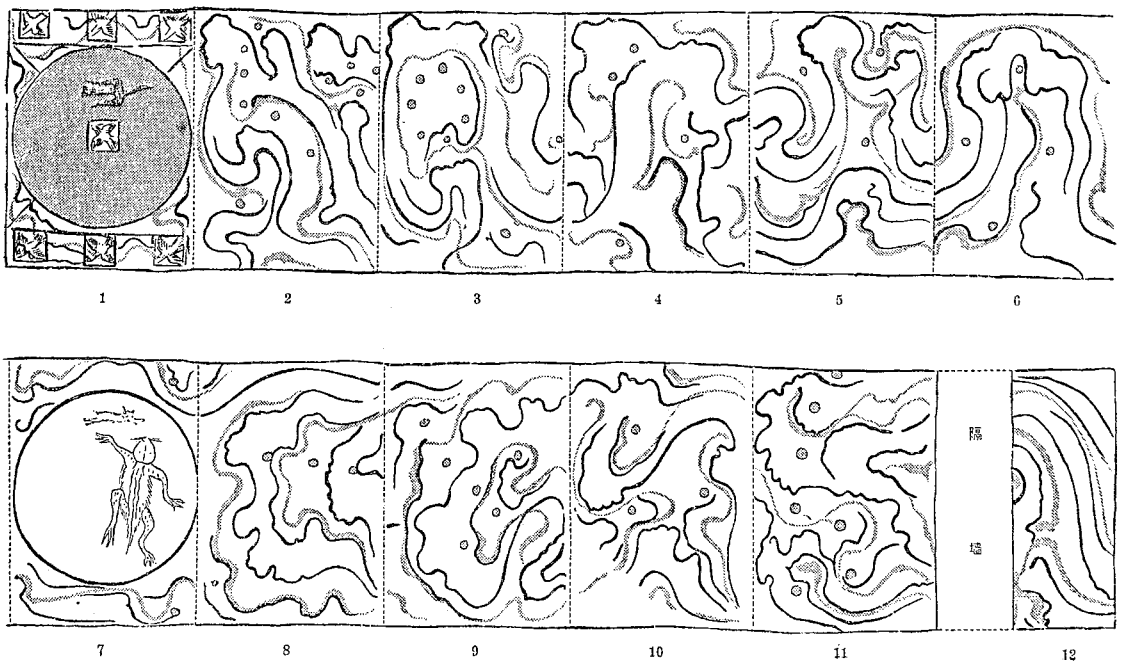

図 5　洛陽前漢壁画古墳の星象図

一つにはこうした壁画の類似から出ている．ところで天井に星座が描かれた高句麗の壁画古墳はあまり多くない．しかし皆無ではなく，例えば通溝で発見された舞踊塚の天井にみられる．[5] この塚は有光氏のA群にふくまれるもので，天井にいびつな同心円が描かれ，もっとも外側の円には三本足の鳥によって示された太陽が東に，蟾蜍で示された月が西に描かれ，その内側には粗雑な小円をつないでいくつかの星座が描かれている．これを見易く図4に示した．一見して北斗七星と推定されるものがあるが，他はやや同定が困難である．中村清兄氏[6]は，これを四方宿を代表する房・心（東），柳(南)，参(西)，危（北）であろうとされているが，果してそこまで断定できるものであろうか．

この舞踊塚の星座はきわめて大ざっぱなもので，高松塚の精密さと比較できるものではない．また墨でざっと描かれ，金箔を置いた高松塚の繊細さとも比較ができない．しかし高句麗の古墳にも，金箔で星をちりばめた壁画が発掘されている．1972 年の秋の調査には北朝鮮と韓国から考古学者がやって来て，高松塚に入室調査した．そのあと珍らしくも両国の学者が奈良国立博物館に会合して，それぞれの見解を発表した．政治的に対立する両国の学者が同席したことに一同が拍手を送って，当時の新聞も大きくこの会合をとりあげた．この席で，北朝鮮の学者は高松塚と高句麗古墳との類似を強調したのはもちろんであるが，携えてきた古墳の映画が発表された．そうした古墳の1つに，星に金箔を置いたものがあった．当日のメモが見当らないので，それが何という古墳であったかは不詳であるが，しかしかなり荒れた壁画で，星々をつなぐ線も明瞭でなく，星座の同定はとうていできないものであった．結論的にいえば，星座に関する限り，高句麗の影響はごく少ないのではなかろうか．

3.　中国古墳の壁画星図

中国の古墳に日月や星を描くことは，かなり古くから行われた．『史記』始皇本紀に秦始皇帝の墓を造営するありさまを記述して，「上には天文を具え，下に地理を具えた」とみえている．恐らく天井に日月星辰を描いたのであろう．死者が生前と同じような生活をすることを願って，現実の自然と同じように，天井に天体を描いたのであろう．四神を描くようになると，いくぶん動機はちがってくるかも知れない．四神によって墓を守護するというような思想が存在する可能性も考えられるであろう．中国で知られた古墳の中で，星が描かれているもっとも古いのは前漢（西漢）時代のもので，1957 年に洛陽で発掘された(図5)．これについては中国の考古学者夏鼐氏の詳しい報告が行われている．[7] この星象図は墓室に至る前室の天井に近い部分に描かれ，12 枚の磚の上を白く塗り，朱と墨を使っている．1と7は太陽と月を示し，他は流水模様の中に朱で小円が描いている．夏氏はこれらの点が星を示すものと考え，その一々について星座の同定を行っている．例えば 11 は北斗七星であろうと推定している．しかし何分にも不十分な星図といえ

よう．

1974 年2月になって，洛陽の近くから北魏時代の元乂の墓が発掘された．元乂という人物は北魏王朝の一族で一時は大へんな権力者であったが，孝昌2年 (526) に毒殺された．数え年の 41 才であったという．その墓はかなり大きなもので，墓室についていうと，南北が 7.5 m，東西は7m のほぼ正方形で，ドーム状になった天井の高さ 9.5m はもある．盗掘にあって四方の壁画はすべて損壊しているが，天井には白地の壁面に朱で描いた星象図（図 6）が残っている．[8]この図は直ちに王車，陳徐の両天文学者によって研究が行われ，図7のような同定が行われた．この同定がすべて正しいかどうかは別として，高松塚の星象図とは全くちがっていることは明白である．中央に描かれたのは天の川と思われ，これを中心にほぼ実際にみえる天空を描いたものであろうか．

星象図を除く高松塚の壁画が唐代のそれに類似しており，そのため唐代の影響を受けて描かれたと思われ，従って7世紀以降のものであろうというのは，多くの日本人学者のほぼ一致した見解である．ところで近年になって唐代の壁画古墳がかなり多く発掘されており，その中に星象図のあるものがいくつか報告されている．しかし，これらの古墳は高松塚に比べてはるかに規模が壮大であり，それにともなって壁画もバラエティーに富み，加えて副葬品の種類も多い．こうした壁画や副葬品の研究に忙しく，星象図にまで手がまわらないというのが，中国人学者の現状のようである．そのために詳しい報告はほとんど出ていない．秋山進午氏がつくられたリストには 18 基の唐代壁画墓があり，その中で天井に星象図が描かれたのは5基である．[9] この5基を摘記すると，

	墓主	埋葬年代	発掘年	文　献
(1)	永泰公主	706	1960	文物 '64-1
(2)	薛莫・史氏	728	1955	考古通訊 '56-6
(3)	蘇思勗	745	1952	考古 '60-1
(4)	蘇君	?	6991	考古 '63-9
(5)	?	?	1959	文物 '59-8

である．なお (1)～(4) は西安附近，(5) は山西省太原附近にある．以上の中，(2), (3), (5) の文献には星が描かれていることを記述するのみで，どういう図柄であるかにふれていない．ただ薛莫・史氏の夫婦を葬った墓では，描かれた星の直径がほぼ 5cm であることを注意している．残りの (1), (4) に対する記述も簡単で，ほぼ次のようである．

(1) 墓室とその前室の天井にほぼ同じ図柄がある．すなわち方形，ドーム状の天井の東南角から西南角に銀河が描かれ，深灰色の天空に白色の星が密布される．

(4) 磚でたたんだドームに草泥土を塗り，白石灰で日月，星辰を描く．東側に太陽，西側に月があり，その間，星がちりばめられる．星のあいだを帯のように銀河が貫く．

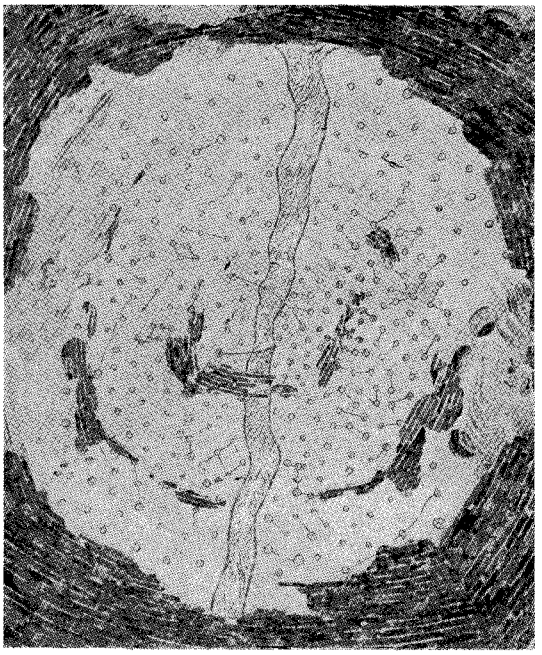

図 6　河南洛陽北魏墓に画かれた星図

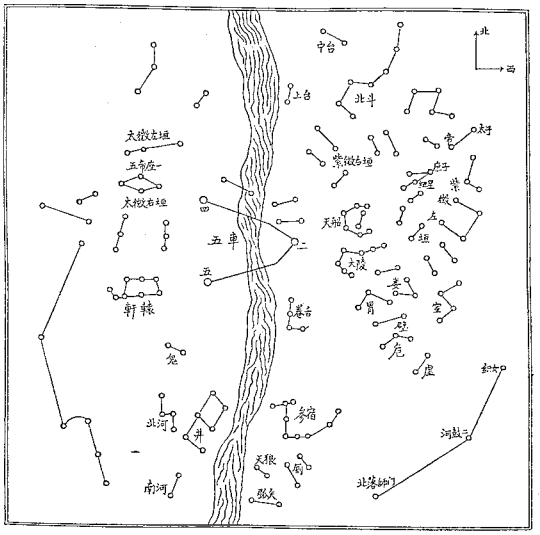

図 7　北魏墓の星座の同定

これでみると，2つの壁画に共通していることは，星は白色塗料で描かれており，その図柄には必ず銀河がみられることである．それは北魏元乂墓の図柄を受けついでいるといえようか．ともかく高松塚の図柄と大きくちがったものと断定することができる．

ところが 1973 年になって，高松塚の天井とほぼ同じ図柄を持った唐代の壁画古墳が報告された．その古墳は

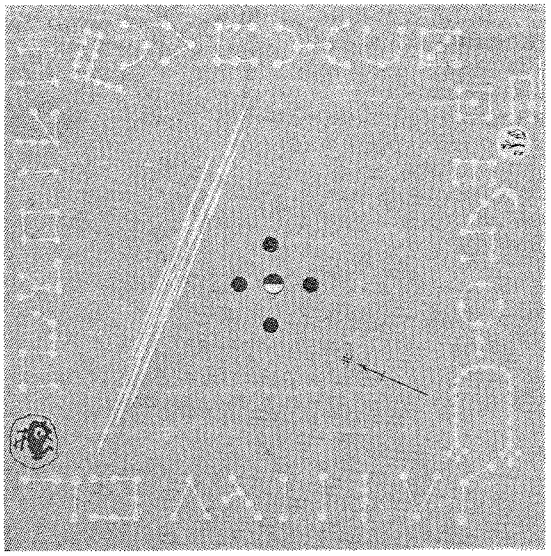

図 8　アスタナ古墳の星図

中国本部より遠く離れた新疆省トルファン県アスタナ・カラホジャ両地区で 1963～65 年にわたって発掘が行われた 46 基の墓の1つである.[10] ここの古墓群は次の3時期のものから成っている.

第1期　晋から南北朝中期（3～6 世紀初）
第2期　南北朝中期から初唐（6 世紀初～7 世紀中）
第3期　盛唐より中唐（7 世紀中～8 世紀中）

いま述べてきた星象図のあるものは，アスタナ地区にあって 65 TAM 38 と呼ばれる古墳で，時代は第3期に属するものと推定された．墓室の天井部分に，図8に示したように，少しくずれた四方の壁に二十八宿が描かれている．そのほか左下（東北）部分に朱で描いた太陽（中に烏），右上に桂樹と杵を持つ月が描かれる．さらに月の近くには残月がみえる．中央のところに描かれ5つの円が何を意味するかはわからない．さらにこの星象図の紹介者の説では，左方の何本かの白色の斜線は多分銀河であろうといっているが，それにしてはややはっきりしない．高松塚に比べていくぶんの相違はあるが，二十八宿を四方の壁に配置した図柄という点でほぼ一致する．

4. 結　　び

高松塚との関連で朝鮮中国の壁画古墳にふれてきた．これら古墳の中，アスタナ古墳の星象図はきわめて興味が深い．全天の星座をこくめいに描くのではなく，高松塚のようにごく特定の星座を抽出して描くばあいは，1種の図案化が行われているといえる．そうしたばあいの図柄が，日本において独自に考案されたものであろうか．それとも中国で考案され，それが西方にもたらされてアスタナの壁画となり，東方では高松塚のそれになったのであろうか．しかし中国本部ではそうした星象図はまだ発見されていない．しかしアスタナの星象図に比べて，高松塚のそれはいっそう実状に近いものである．帰化人の手ではなく，克明な日本人の手になったように思えるが，もちろん断定できない.[11] これまでのところ星に金箔を置いた例は中国に乏しい．どこからこうした発想を得たのであろうか．それはともかく造営当初の天井には，200 個に近い星がキンキラと輝き，じっさいの夜空よりも美しかったことであろう．ここに眠った人が誰であったか，これも想像の域を出ず，結論はでていない．この小論も，資料の提供が中心であり，結論にまで至っていない．

参 考 文 献

1) 淳祐天文図については近く天文月報に書くつもりである．
2) この挿図は文化庁編『高松塚古墳壁画』(1973) 中の高松塚古墳壁画報告書に発表したものである．
3) 橿原考古学研究所編『壁画古墳高松塚』(1972), p. 141.
4) 同上，p. 142 以下．
5) 日満文化協会刊『通溝』下，1940．舞踊塚の条参照．なお同じく輯安県角抵塚の天井にも星座がみられる．筆者「東洋天文学と高松塚古墳」創元社刊『高松塚壁画古墳』(1972) 所収を参照．
6) 中村氏の説は『通溝』にも引用されているが，もともと考古学論叢　第1巻，(1937), pp. 374-401 に「高句麗時代の古墳について――その星像壁画を中心として」として発表された．なお恒星社刊新天文学講座 1『星座』p. 128 参照．
7) 夏鼐：洛陽西漢壁画墓中的星象図，考古，1965-2, pp. 80-90.
8) この星象図は文物，1974-12 期に収録されている．なおこの号には紫金天文台の王車，北京天文館の陳徐の両氏による洛陽北魏元乂墓的星象図なる論文がある．同誌，pp. 56-60.
9) リストは創元社刊『高松塚壁画古墳』にある．このリストによれば文物 1957-3 に紹介された李爽墓にも星辰が描かれているとあるが，文物にはそうした記事はみえない．従ってこれを削除して，結局5基となった．
10) 新疆維吾児自治区博物館：吐魯番県阿斯塔那―哈拉和卓古墓発掘簡報 (1963-1965)，文物，1973-10, pp. 7-27.
11) 創元社刊『高松塚論批判』(1974)，p. 197 に，有坂隆道氏は高松塚の星座の筆者を論じ，「その忠実な描き方，いわば教科書そのままの描き方は，まことに日本的性格を感じさせ云云」という．